

スポーツ存在の論証：「スポーツシッディ」和訳 (3)

伊原，照蓮

<https://doi.org/10.15017/2328697>

出版情報：哲學年報. 32, pp.1-12, 1973-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



ス ポ ー タ 存 在 の 論 証

ー「スポータシッディ」和訳(3)

伊 原 照 蓮

は し が き

本和訳は拙稿「スポータ存在の論証ースポータシッディ和訳(1)」(九州大学文学部40周年記念論文集, 昭和41年1月所載)及び「スポータ存在の論証ースポータシッディ和訳(2)」(『哲学年報』第26輯, 所載)につづくものである。

略 号

G. : Gopālikā.

ŚV. : Śloka-vārtika, Chowkhambhā Skt. Ser. 本

TNV. (A.): Tantravārtika, Ānandaśrama Skt. Ser. 本

6 (問) (新月祭等の場合にみとめられる特性が、字音の場合に) 存しないことがどうしてあろうか? それら(字音)も亦、個々の(字音の)知覚に基づく潜在力(samskāra)を媒介として最後の字音の知と共に、一つの目的を達成することができるのである。(Śabara-bhāṣya¹⁾においてつぎの如く) 説かれている通りである。「先行の字音より生じた潜在力(samskāra)に伴われて、最後の字音が(意味を)表わすのである」。従つて(われわれ字音論者の主張に)過失はない。

(註) (1) Śabara, p.10 l.18 但しそこでは vācakaḥ ではなくして, pratyāyakaḥ とある。

(答) それは正しくない。

(第6偈)

「甲の事物の性質の知覚 (prakhyā) より生じた潜在力 (saṃskāra) は実に、それ (= 甲の事物の性質と同種類の、事物の性質) に対する認識 (vijñāna) の原因 (hetu) となるのである。それ (= 字音の知覚より生じた潜在力) からは、(字音とは種類を異にする) 意味 (artha) に対する知が形成されることはない。」

甲の事物の知覚より生ぜしめられた潜在力 (saṃskāra) は実に、一定の原因¹⁾ による覚醒の基礎となるものであり、正にその同じ甲の事物に対する知 (dhi) を顕現せしめるのである。(甲以外の) 他のものに対する(知を顕現せしめる) のではない。なぜなら、牛を弁別する知より生じた潜在力が、馬の想起に役立つということは決してないからである²⁾。

(註) (1) 専念 (praṇidhāna) 等を指す。

(2) この一節の論旨を論式 (prayoga) の形で示すとつぎの如くである。(G. p. 46, ll. 8-10)

(宗) 字音の知覚より生じた潜在力が意味 (artha) の理解の原因とはならない。
(varṇānubhavajanitaḥ saṃskāro nārthapratyayanimitam.)

(因) それを対象とする知より生じたものではないからである。(atadviṣayajñānajananyatvāt.)

(喩) 例えば牛を弁別する知より生じた(潜在力)が、馬という観念の(原因とはならない) 如くである。(gavāvagrahapratyayajanito yathā aśvatvapratyayasya.)

7 (問) (字音論者 varṇavādin はつぎのように) 考えるかもしれない。(すなわち) 個々に (字音からは) 求められる結果 (= 文章の意味の知 vākya-artha-jñāna と単語の意味の知 pada-artha-jñāna) の現われることはないから、また (字音には) 同時性 (yugapadya) は存しないから、それ (= 文章の意味の知と単語の意味の知) にはなんらかの種子が必然的に想定されるべきである。(その種子はスポーツを表わす語 śabda である、とスポーツ論者は主張するかもしれないが) それは (スポーツを表わ

す) 語ではない。多くの想定に立つという過失に陥るからである。それ(=スポーツを表わす語)には、①(スポーツ)自体と②意味の理解のための原因存在、という二つのものが想定されなければならない。

これに反して(潜在力説 *saṃskāra-pakṣa* においては多くの想定に立つという過失は存しない。すなわち)潜在印象(*vāsanā*)とも呼ばれる潜在力(*saṃskāra*)は、非常にはつきりした感受(*saṃvedana*)によつて知覚されたものを対象とするものであり、想起(*smaraṇa*)という結果が生ずることからそのもの自体(の存在)が推定されるものであり、(このような潜在力を)すべての論者は等しく承認しているのである。

(註) 字音論者は潜在力説 *saṃskāra-pakṣa* をとるのであるが、その潜在力説はここでは潜在印象説 *vāsanā-pakṣa* というかたちで主張せられている。潜在力 *saṃskāra* ということばを用いて意味の理解の可能なことを説いたのは *Śabara-svāmin* であった(第6偈の *pūrva-pakṣa* 参照)。しかし潜在力 *saṃskāra* ということばには「新得力 *apūrva*」の如きものをも含む。そして *apūrva* の如きは<想起の原因 *smṛti-hetu*>とはなりえない。<想起の原因>となる潜在力 *saṃskāra*、それを潜在印象 *vāsanā* とよぶ。従って *saṃskāra* と *vāsanā* とでは前者はより広い概念であり、*vāsanā* は *saṃskāra* の一部分にすぎない。この潜在印象説 *vāsanā-pakṣa* を説いたのは *Kumārila (Vārtika-kāra)* である(*G. p. 47, l. 14*)。G. はその当該箇所として *ŚV. sphoṭavāda. 99* を引く。

athavā vāsanā-eva-astu saṃskāraḥ sarva eva hi /
dṛḍhajñāna-gr̥hite 'rthe saṃskāro 'sti-iti manvate //

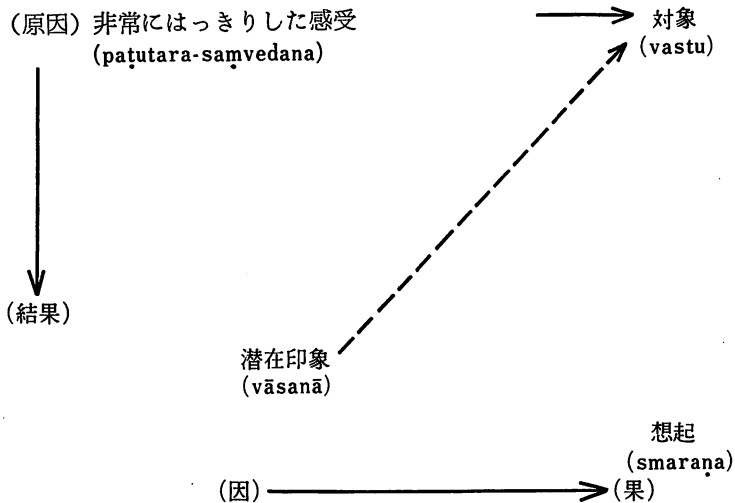
「或は潜在力 *saṃskāra* (といわれているものは)、(もろもろの字音によって生じた)潜在印象 *vāsanā* に外ならざるべし。なぜなら、意味が確実な知によって把握された場合、潜在力 *saṃskāra* が(そこには)存在する、とすべてのひとびとが考えているから。」

ここで述べられている潜在印象説はこの *ŚV.* の偈の趣旨をさらにくわしく敷衍したものに外ならない。

この箇所での字音論者の主張の論旨はつぎの如くである。すなわち、意味の理解が生ずるためにはそこになんらかの種子が考えられなければならない。その種子を、スポーツ論者は、スポーツを表わす語である、と説く。字音論者をしてい

わしめれば、スポーツ論者のこの主張には、二つの想定が前提とされている。(1) スポーツ自体——これは周知されているものではない (aprasiddha) ——と(2) スポーツが意味の理解を生ぜしめる原因存在となるという点、とである。このようにスポーツ論者の主張には二つの想定が前提とされているのに対して、字音論者の説く潜在力 *saṃskāra* に関しては、すべてのひとがその存在を承認しているのであって、その点でスポーツ説よりもすぐれている、というのである。

なおここで述べられている(1)感受 *saṃvedana* と(2)潜在印象 *vāsanā* と(3)対象 *vastu* との関係を図示すれば下の如くなる。



しかしそれ (= 潜在力 *saṃskāra*) が意味の理解の原因となることについては異論がある。而してその場合、それ (= 潜在力) があるときに (意味の理解の) 存在 することが、(潜在力が意味の理解の原因であることを) 決定せしめる根拠となる。(それは丁度、潜在力より生ずる) 別の結果 (である想起 *smaraṇa*) の場合と同様である。

(註) G. はこの個所で ŚV. sphoṭavāda. 100 を挙げている。

tasya-arthabuddhi-hetutve viśaṃvādo 'sya ¹⁾ nirṇaye /
tad-bhāva-bhāvitā hetur-anyatra-iva pratīyate //

(① G. 引用の偈には artha-nir^o とあるも Chowkhambhā 本によって訂正)

「それ(=saṃskāra)が、意味の知の因となることについては異論がある。＜それがあるときに結果が存在する＞という理由が、それ(=因果関係)を決定するために役立つ、とみとめられる。他の場合(=smṛti の場合)と同様である。」

この一節はこの偈の趣旨を敷衍したものといえる。ここに示されているのは＜甲があるときに乙が存在するならば、甲は乙の原因である＞という論理である。

本文の「別の結果の場合と同様である。」という箇所について G. はつぎの二つの解釈を示している。すなわち、

(i) 「別の結果」を想起 smaraṇa とよむ。その場合はつぎのような意味になろう。潜在力 saṃskāra——厳密には潜在印象 vāsanā——が原因となって、想起が結果として生ずる。このことは一般にみとめられているところであるが、それと同様である、というのである。

(ii) 種子等が原因となり、芽等が結果として生ずる。それと同様である、というのである。

いまはこの二つの解釈のうち(i)をとった。因みに上掲 ŚV. sphoṭavāda. 100 の偈の中の「他の場合 anyatra」について Pārtha Śārathi Miśra は、括弧内に示した如く「smṛti の場合の如く」と註している (Chowkhambhā 本, p. 535, l. 20)。

実に先行の字音の知(vijñāna)によつて預託せられた潜在力(saṃskāra)を欠く場合には、(末尾の)単独の visarga だけで意味の知が生ずる、ということのをわれわれが観察することはない。而もそれ(=先行の字音の知)によつて預託せられた潜在力)が存する場合には、(最後の visarga より意味の理解の生ずることを)われわれはみるのである。

(註) この一節は、前節において述べたことを否定 vyatireka の面から説いたものである。

なるほど(字音以外の)他の場合には、これ(=潜在印象 vāsanā と呼ばれる潜在力 saṃskāra)が、(その本来の結果である想起以外の)別の結果(=意味の理解)を生ぜしめる原因¹⁾となることは認められない。しかしながら、(その本来の結果以外の)別の結果をも生ぜしめるという

能力²⁾はなにものによっても阻害されることはないのである³⁾。

(註) (1) G. によれば或る一本ではこの箇所は *kārya-antara-prakāratā* (別の結果を生ぜしめる補いとなること) とある。ここで *prakāra* とは *śeṣa* の意味である。意味の理解を生ぜしめる原因は字音であり、潜在力はその補い (*śeṣa*) である、という見解にたった叙述であると理解さるべきである、という。

(2) G. はこの能力についてつぎのように説明している。すなわち、一つのものが二つ以上のものに対する能力 (*sāmarthyam*) をもつということはありうる。例えば一つの行為 (*karma*) が、結合 (*saṃyoga*) と分離 (*vibhāga*) の原因となるが如くである。また同一の火が、燃えること (*daha*) と焼くこと (*pāka*) との原因となる点を指摘している。

(3) G. はここで ŚV. *sphoṭavāda*. 102 を引く。

yady-api smṛti-hetutvaṃ saṃskārasya vyavasthitam /
kāryāntare 'pi¹⁾ sāmarthyam na tasya pratiśidhyate //

(① Chowkhambhā 本には *kāryāntareṣu* とある。)

「潜在力 *saṃskāra* が想起 *smṛti* の因であることは確定しているけれども、それ (= 潜在力) が (想起以外の) 別の結果 (= 意味の理解) に対しても能力を有することは否定されることはない。」

この一節はこの偈の趣旨を説明したものということができよう。

それ故この領域においては (= 字音から意味の理解がえられる場合には), 潜在力——それが存在することは、別の結果 (= 想起 *smaraṇa*) によって想定されている——に、別の能力 (*śakti*)¹⁾ が想定されるべきである。なぜなら、別の結果 (= 意味の理解) が認められるのであるから²⁾。

(註) (1) 潜在力 *saṃskāra* は想起 *smṛti* の原因であるから、想起に対するある能力が想定される。それと同様に、意味の理解に対して、「別の能力」が想定されるべきである、というのである。

(2) G. によってこの所論を説明するとつぎの如くなる。すなわち、能力の有無はそこに結果が認められるか否かによって確定される。換言すれば、結果が認められる場合にはそこに能力が想定されるし、結果が認められない場合にはそこに能力を想定することはない、というのである。これがここでの所論の基本的考え方である。ところで潜在力 *saṃskāra* が想起 *smaraṇa* を生み出すことはあ

らゆる場合に承認されるところである。いま意味の理解の生ずる場面に注目してみると、そこには想起以外の他の結果（＝意味の理解）が生じているのであるから、潜在力が意味の理解をも生み出していると考えざるをえない。従って潜在力に意味の理解を生み出す「別の能力」を想定すべきである。これがこの所論の大綱である。

なお G. はこの箇所では ŚV. sphoṭavāda. 103 を引用している。
tena saṃskāra-sadbhāvo na-anena-eva prakalpitaḥ¹⁾ /

tasya-arthapratyaya-hetutvam²⁾-adṛṣṭaṃ kevalaṃ kṛtaṃ //

(① Chowkhambhā 本には evaṃ prakalpyate / とある。② Chowkhambhā 本によって訂正。)

「それ故潜在力の存在は、かれ（＝字音論者、或は Śabara）によって想定されたのではない。（かれによって）主張された唯一つの不可見の事柄は、それ（＝潜在力）が意味の理解の因であるということである。」

これに反して、スポータの想定は正しくない。なぜなら、それ（＝潜在力）——それが存在することはすでに想定されている——に対して能力（śakti）だけを想定することによって、結果（＝意味の理解）（の生起についての説明）は可能である。従つて（スポータの存在を推定せしめる）義準量（arthāpatti）は消滅してしまうからである。

（註）義準量は、そのように考えなければ不可能であり、別様にはその可能性が考えられない、ということの上になり立つ。しかるにいまの場合、潜在力に対して能力 śakti を想定することによって、意味の理解という現象は説明できるのである。それ故、義準量は成り立たず、従って義準量によって推定せられるスポータの想定は正しくない、ということになる。

G. はこの箇所では ŚV. sphoṭavāda. 105. a-b. を引く。

kṣīna-arthāpattir-evaṃ ca na sphoṭaṃ parikalpayet /

「（スポータの存在を推定せしめる）義準量は、かくの如く消滅する。（従つてひとは）スポータを想定すべきではない。」

（答）（以上汝字音論者によって主張されたこと）それは適切さを欠くように見える。すなわち、

(第7偈)

「一つの能力 (śakti) が、さらに別の能力を持つということはありません。たとえそこに (潜在力が) 存在しても、(意味の理解は) 見出されない。また特殊性をもたない原因から、(他と) 異なったものが生ずるということはありません。」

潜在力 (saṃskāra) とは、別個の知の生起をその領域としてもつものであり、先行の知によってアートマン (ātman) の中に導入されたところの、能力 (sāmarthyam) に外ならない、と (このように) 賢者達は説いている。

(註) 潜在力 saṃskāra は一つの能力 (sāmarthyā, śakti) に外ならない、ということ指すのがこの一節の趣旨である。而してこのような見解は既に賢者達が説いているところである、というのである。G. はこの箇所を Tantravārtika. 2. 1. 2. apūrva-adhikaraṇa の中より śakti についての所論を引用している。
śaktibhiḥ sarvabhāvānām vyavahārānupātītā /
tena-anyadeśakāle 'pi rūpe tābhiḥ sa sidhyati //

TNV. (A.) p. 395.

「すべてのものは、もろもろの能力を媒介とすることによって (始めて) 習慣的行為の中に具現されるのである。それ故 (習慣的行為の中に具現された) 形態が、別の場所・時間において実現されるものであっても、その習慣的行為はそれら (もろもろの能力) を媒介とすることによって成立するのである。」

TNV. がここでいわんとしていることは大要つぎの如くである。すなわち、ここでは「新得力 apūrva と名付けられる能力」が問題とされている。そしてかかる能力が存在するからこそ、たとえ個々の行為が消滅してしまっている、または個々の行為がそれぞれ別の場所或は時間において行なわれても、そこにはかかる能力に内在する「同時性 yaugapadyam」が働き、かくして所期の結果がえられるのであると。TNV. (A.) p. 394 ll. 29. ff.

TNV. において示された「能力」こそこの一節において述べられている「先行の知によってアートマンの中に導入されたところの能力」に外ならない、と G. はいうのである。

ついで G. は、能力の所属の問題についての TNV. の所論を引く。

śaktiḥ kārya-anumeyatvādyadgatā-eva-upayujyate /
tadgatā-eva-abhyupetavyā svāśrayā-anyāśrayā-api ca //

TNV. (A.) p. 398.

「能力は、（それが）甲のものに所属するとしてこそ有用である場合には、その甲のものに所属するものとして承認されるべきである。（能力が行為）自体を依り処としようと、或は他のものを依り処としようとも。なぜなら（能力の存在は）結果から推定されたものだからである。」

TNV. における問題点の推移は以下の如くである。すなわち、行為 (karma) に能力が所属するすると、その行為が消滅してしまった後にどうして能力が継続しうのか、という疑問が生ずる。この疑問に対しては、もしその能力が、行為自体ではなくして、行為者に所属するならば、行為が消滅した後にもその能力が消滅することはない、と答えられる。そうするとつぎの疑問がさらに生ずる。或るもののもつ能力が、他のものに所属するということはどうして可能かと。上掲の偈は、かかる疑問に対する答の一つである。

さらに、＜アートマンに所属する能力は先行の知によって、(i)生ずるのか、(ii)或は顕現するのか＞という問題に G. はふれる。そしてこの両説の根拠となる所論を G. は TNV. より引用する。

(i) ＜生ずる＞との見解の根拠となる TNV. の偈。G. はその偈の一部を引用するのみであるが、ここには偈の全文を掲げておく。

āvṛttibhir-yathā-adhyāye saṃskāro¹⁾ bhavati kramāt /
vākya-avayava-rūpeṇa tathā-apūrvam bhaviṣyati //

TNV. (A.) p. 399.

(① G. はこの偈の冒頭より saṃskāraḥ までを引用。また G. 所引の文には、adhyāye の代りに、jñeye とある。)

「聖典学習の際に反復によって潜在力が、文章の部分のかたちをとって、順次に生じてくる如く、それと同様に新得力は生ずるであろう。」

(ii) ＜顕現する＞との見解の根拠となる TNV. の偈。G. はこの偈の後半のみを引用するが、いまはその全文を示す。

na-ekarūpā-eva bhāvānām-abhivyaktiḥ pratiyate /
ātmasthoniṃlanam tena vyaktir-asya bhaviṣyati //

TNV. (A.) p. 400.

「事物の顕現が（常に）同一の形態をとる、ということは認められない。従ってそれ（＝新得力 apūrva）の顕現は、アートマンに住するもの（＝新得力）が、（果実を与えるために）眼を開くということであろう。」

最後に G. は、能力への障害の排除についての TNV. の所論を引く。

sarva-avāpti-samartho vā prakṛtyā-ātmā sadā-īṣyate /
 kaś-cit-tu pratibandho 'sya karmabhiḥ so 'paniyate //

TNV. p. 400.

「あるいはアートマンは、本性上常に、一切を獲得する能力をもつ、と認められる。しかしこれ（＝アートマンのもつ能力）には、一定の障害が存在する。それ（＝障害）はもろもろの（祭式）行為によって排除されるのである。」

G. は以上のように、TNV. の中の apūrva についての所論を引用した後に、
 <これらすべては、apūrva に関して述べられたことであるが、同一の論理のものであるからここにも妥当する、と認められるべきである> といっている。
 saṃskāra と apūrva とが śakti という観点から同一の論理の上にたつものと
 考えられているわけで、この点筆者には興味深い。

而してもろもろの能力が（さらに）別の能力を持つということはありません。なぜなら、（もしそれを認めるとすると）無限遡及 (anavasthā) (の過失) に陥るからである。

(註) この一節は、偈の「一つの能力が、さらに別の能力を持つことはありえない」という部分を説明したものである。<無限遡及の過失に陥る>とは、つぎのような意味に解せられる。すなわち、字音論者は、意味の理解を可能ならしめる能力が saṃskāra にある、別言すれば saṃskāra はそういう能力を持つ、と主張するわけである。ところが上に見てきた如く、saṃskāra がすでに一つの能力 (śakti, sāmāthyā) なのであるから、字音論者の主張によれば、能力 (甲) が別の能力 (乙) を持つ、ということになる。もしこれを是認するならば、別の能力 (乙) がさらにまた別個の能力 (丙) を持つ、ことをも承認せざるをえなくなるわけで、従って無限遡及の過失に陥る、というのである。

また先行の字音が順序を無視して発音された場合には、（それら先行の字音によって）生ぜしめられた潜在力 (saṃskāra) が存在しても、（そこに）意味の理解は認められない¹⁾。それ故これ（＝意味の理解）はそれ（＝潜在力）を因とするものではありえない²⁾。（例えば同じ綴字より成り而も語順が異なっている二つの語を比較した場合）たとえ語順が異なっているても、（そこに生ずる）潜在力は、個々に綴字が知覚されることによ

って生じたものであるから、（それら二つの語より生じた潜在力が）相互に（他を力で）凌駕することはないのである³⁾。

(註) (1) この一文は、偈の「たとえそこに潜在力が存在しても、意味の理解は見出されない。」という部分の説明である。

(2) この一文について G. は別の解釈をも示している。それによると、この一文の訳はつぎの如くなる。「それ故これ（潜在力）が、それ（＝意味の理解）の因となることはありえない。」

(3) G. によるとこの一文のいわんとするところはつぎの如くである。すなわち、例えば (i) *jarā* と (ii) *rāja* の二語を比較してみるとする。この二語は綴字はまったく同じであり、異なるのは綴字の順序のみである。そこで字音論者はつぎの如く主張する。すなわち、汝スポーツ論者は<字音が順序を無視して発音された場合には、それら先行の字音によって生ぜしめられた潜在力が存在しても、そこに意味の理解は認められない>というが、どうしてそういうことになるのか？もし潜在力が無いのであれば、意味の理解も存在しないであろう。字音の順序が異なる場合には、意味が理解せられないのではなくして、それぞれに異なった意味の理解が生ずるのである。例えば、*jarā* と *rāja* の場合の如くである。このようにまったく同一の字音が使われていても、その順序が異なる場合には、相互に異なった潜在力を生ずるのであり、従ってそれぞれに異なった意味が理解せられるのであると。以上のような字音論者の主張を予想して、これにスポーツ論者の立場から反駁したのが、この一文である。スポーツ論者の反駁の趣旨はこうである。まず、もろもろの字音は、(A)集合してから潜在力を生ずるのか、(B)あるいは各字音毎に個別に潜在力を生ずるのか？この中(A)もろもろの字音が集合してから潜在力を生ずる、ということとはありえない。各字音は発音されるとその直後に消滅してしまうのであるから、それらの字音が集合することは不可能である故である。従って(B)各字音毎に個別に知覚され、それぞれの知覚に基づいて個別に潜在力が生ずる、と考えざるをえない。そうすると、*jarā* という語と *rāja* という語の場合、字音は両者共にまったく同一であるから、各字音が個別に知覚せられた結果生ずる潜在力も、同一ということになる。換言すれば、*jarā* という場合の潜在力と、*rāja* という場合の潜在力とは異らない、ということになってしまう。

以上がスポーツ論者の反駁の趣旨である。ここでは、汝字音論者が潜在力説 *saṃskāra-pakṣa* を採って主張するならば、このような誤った帰結に墮する、ということを描したものと解すべきであろう。

また（汝によつて）考えられたこの潜在力は、他の場合には見出されな
 いこのような種類の性質¹⁾をもつたものである。（そのような潜在力が）
 特殊性を欠いた原因から発生することはいへない。而して字音自体が個
 々に特殊性をもつことはない。また他（の字音）との協力²⁾が、これら
 （もろもろの字音）に区別を与える、ということもない。（字音は）一定
 の順序次第に従っているものであるから、（それら字音が）協力すること
 は不可能である故である。（それはまたなに故か、と問うなら）既に消滅
 した（字音）と未だ生じない（字音）とは、その時（＝結果の生ずる時）
 にはまったくの非存在であるから、優越性（*atiṣaya*）をもたない。それ故
 に、（汝字音論者の主張するような、*saṃskāra* とよばれる）結果の生起を
 助けることはありえないからである。このこと（＝協力が不可能であるこ
 と、及びその理由）は、既に（第4偈の説明の中で）説いた。

（註）(1) G. によれば、「他の結果の生起」という点で、一般に承認されている
saṃskāra とは性質を異にした、という意味である。

(2) 原語 *samavadhānam* この語について G. はつぎのように説明している。
sambhūya-avadhānam eka-kārya-unmukhamity-arthaḥ / sannidhānam-
ity-arthaḥ / (G. p. 56, l. 20). なお G. によれば、*samavadhānam* の代
 りに、*sanidhānam* とある text もある。